



# 調 査 報 告 書

平成21年10月30日

大分県立竹田高等学校剣道部事故調査委員会

## 目 次

### I 部

1. はじめに.....	2
2. 聴取の対象者.....	3
3. 経 過.....	3
1) 事故前のインフルエンザによる自宅待機.....	3
2) インフルエンザ自宅待機後の練習再開.....	3
3) 試合を控えて.....	4
4) 当日の練習.....	4
① 体調のチェック.....	4
② 剣道場の水分補給などの準備.....	4
③ 剣道場の当日の気温.....	5
④ 練習メニュー(練習時間・インターバル・練習内容).....	6
ア. 全体の生徒の練習メニュー.....	6
イ. 本生徒の練習メニュー.....	7
5) 当日の剣道練習中の指導者の指導内容・方法.....	8
6) 事故の予知.....	9
7) 事故発生時の本生徒の状.....	10
4. 竹田高校剣道部事故報告書 調査委員会 総括意.....	12
1) 今回の事故について.....	12
2) 高校スポーツのあり方.....	14
5. おわりに.....	14

### II 部

調査委員の所感－今後の事故防止のために.....	15
--------------------------	----

### III 部

熱中症についての共通理解のために(別冊).....	21
---------------------------	----

## I 部

### 1. はじめに

今回部活動中に熱中症にかかり、病院に搬送された生徒が亡くなった事故が発生した。これを受けて学校の要請により調査委員会が組織され事故調査に当たることになった。

教育の場で生徒が亡くなるということは、亡くなった方はもとより、遺族、学校の生徒、教員にとっても悔やんでも悔やみきれない心痛を残すものである。亡くなった生徒に対して残された者のできることはそのご冥福を祈るとともに、事故の経緯を解明し、謙虚に事故を検討し、再度このような事故が起こらないようにすることであろう。

調査委員会の任務は事故の経緯を明らかにすることであるが、調査の中で述べられたことが事実であったかどうかということになると、検証が難しく断定するわけにはいかないことも多い。また死亡事故であるから、学校以外の状況も調査すべきであると思うが、学外にまで調査を広げることはできなかったのも、ご遺族を含む学内関係者の聴取りということになった。そのような限界はあるものの、調査委員会としては、調査に協力してくださった方の話の中から、共通する部分を取り上げてこれを述べることにした。ただ経緯を羅列しただけではそこから汲み取るべき教訓はきわめて抽象的なものに終わってしまう。従って、経過の調査から浮かび上がってくるいくつかのことについて調査委員会の総括的な見解をまとめ、あわせて各調査委員の所感をつけることにした。

見解の内容は関係者にとって痛みを伴うものではあろうが、もとより調査委員会は個人的な責任を云々することがその本意ではなく、今後の竹田高校のみならず部活動においてどの学校においても起こりうる事故の再発防止と、慰霊の一助となることを願うものである。

平成21年10月

大分県立竹田高等学校剣道部事故調査委員会

#### 調査委員

- ・ 臨床心理士関係者
- ・ 心理学関係者
- ・ 剣道関係者
- ・ スポーツ生理学関係者
- ・ 児童生徒相談関係者



## 2. 聴取りの対象者

- 1) 顧問、副顧問
- 2) 練習参加部員(1年生男子3名、2年生男子2名、2年生女子2名)
- 3) 部員の保護者(ご遺族を含む)

## 3. 経過

これから述べることは、ほぼ顧問と部員の意見が一致したことについては、特に区別しないで述べている。意見の違いがあった場合や調査委員会が必要と認めた発言は、必ずしも事実関係は検証されていないが、部員、顧問の意見をそのまま記載した。尚、部員の発言は口内にあげている。

### 1) 事故前のインフルエンザによる自宅待機

8月17日月曜日の後期補習の初日に、剣道部生徒から新型インフルエンザ罹患の可能性が出てきたことから、剣道部生徒は補習終了後、会議室に集められ各自で体調観察を行うとともに指示があるまでの自宅待機が伝えられた(後に2名がインフルエンザと判明)。

結果的に自宅待機期間は8月18日火曜日から8月20日木曜日までであった。そして、自宅待機中は「外出を控え、素振りをする。」が顧問より指示されていた。

[練習参加者からの聴取り内容～自宅待機中の過ごし方]

- \* (みんな素振りをやったのかな?の質問に) やっていないと思います。
- \* 家で勉強したり、普通に休日と変わらないように。
- \* みんな補習で勉強しているので、自分も課題をしていました。(素振りは)ちょっとしたぐらい。
- \* 家でテレビを見たり、本を読んだり。素振りは、夜に人がいなくなってからした。

### 2) インフルエンザ自宅待機後の練習再開

8月21日金曜日に自宅待機期間が終わり剣道部生徒は登校した。登校後、剣道場に集まり体温計測などを行い顧問に報告した。その後、各教室にて補習を受けた後、15:00から17:00まで練習を行った。

この日の練習には欠席者や文化祭準備のために部活動を休んだ生徒等もいたため、参加者は1, 2年生の生徒9名中の6名であった。

顧問は日直のため練習には参加せず、生徒に『立てなく(フラフラに)なるまでやったら(終わって)いいぞ』と指示し、職員室で勤務していた。副顧問は家庭訪問のため不在であった。キャプテン他3名が練習状況の報告を適宜行った。

[練習参加者からの聴取り内容～8月21日の練習について]

- \* 『フラフラになるまでやれ』との指示を受けていたが10回ぐらいで終わった。
- \* すぐには慣れなかったけれど、軽い練習から入って、普通に。
- \* (体調は?) 全然問題なかったです。
- \* 21日朝、剣道場で体温をみんな測った、本生徒は36度8分であった。
- \* 本生徒は2～3本程度やったところで、息が上がったらしく、気分が乗らないと言っていた。
- \* いつも通りの練習を行った後に、次の指示を聴きにキャプテン他3名で顧問の所に行った。
- \* 休み明けの久し振りの練習だったので、やはり少し体が重かった。
- \* 顧問に言われた練習をやりました。



### 3) 試合を控えて

男子剣道部員は8月30日日曜日、秋季高校剣道大会(本年度初開催)に出場予定であった。

[練習参加者からの聴取り内容～試合を控えて]

\*練習していなかったから、一週間で詰めないといけなかったから、始業式の日から朝練を入れるようにしていた。

### 4) 当日の練習

平成21年8月22日(土)

#### ① 体調のチェック

- ア. 8月21日(金)までの自宅待機期間は各自で毎日測った体温を顧問に報告し、さらに顧問から教頭に報告されていた。
- イ. 体調は自己管理とし、体調不良の生徒は自ら顧問に申し出るという慣習であった。そのため、生徒からの申告によって指導者が生徒の状況を把握する形をとっている。
- ウ. 顧問は前半の練習で動きが緩慢な生徒がいたので、休憩時には体調不良者に“大丈夫か”と聴いていた。

[練習参加者からの聴取り内容～体調管理について]

\* 体調は自己管理。体調が悪い時は顧問に報告する。  
\* 体調は全然問題なかった。  
\* 体調は自分の判断で顧問に。  
\* 練習中に体調管理はしていない。さぼっていると見ている。殴ってやらせるという感じ。  
\* その前にちょっと頭が痛くてクラクラしていたので、体温を測ったら37度5分ありました。いつもこのくらいの熱だったら練習していたので、いけるかなと思って。話してはいない。  
\* 風邪とかの時には無理はさせないが、足とか腰の場合はちょっと。

エ. 朝、本生徒を送った保護者は『だるそうに感じた』と言っている。

#### ② 剣道場の水分補給などの準備

- ア. 水分はスポーツドリンクの粉末を水で薄めた物をタンクに準備し、不足するようであれば、生徒達が再度作っていた。  
また、顧問の指示で“塩”を水分タンク横に、プラスチック容器に入れるなどして準備させていた。その他、中間食として梅干し入りおにぎりを2個から3個用意し、食べるよう指導されていた。剣道場内は窓をすべて開けた上で、大型扇風機3台を稼働させていた。

#### イ. 顧問の熱中症対策

- ・ 体育協会や教育委員会主催の熱中症対策講習会に出席し、研修していた。
- ・ 昨年夏まで竹田高校剣道部は水分として麦茶を使用していたが、当時他校顧問であった現顧問がスポーツドリンクに替えるよう指導した経緯があった(保護者より)。
- ・ 剣道場の環境を整えようと自費で大型扇風機を購入し、設置した。
- ・ “塩” “梅干し” “梅干し入りおにぎり” を準備させていた。

[練習参加者からの聴取り内容～水分・塩分補給に関して]

- \*代表の人が塩と梅干を持って来ていて、それをみんなが使っていた。
- \*塩分は水分をとるところの横に。とれます。
- \*水分補給はできた。
- \*キャプテンは先生に水を持っていったりするので、飲む時間はあまりない。
- \*キャプテンは全体の指示をするので、先生に水を持っていったりはしない。
- \*あまり飲み過ぎると次の練習ができないので、コップ2～3杯程度にする。
- \*みんなけっこう飲みます。
- \*水分は1年が作ります。毎日。不足することはない。たまにあったが、休憩時間に作っていた。
- \*外に水分を置いていて、そのタンクの中に、その水を飲みに行ったり、扇風機を置いていて、扇風機にかかったりして。
- \*顧問は休憩を長めにとる方で、(練習を)やって、しっかり休みを長めに入れて、水分を摂らせる。

### ③剣道場の当日の気温

剣道場には温度計を設置していて、剣道部の練習日誌の気温記入欄に担当生徒(記入者)が気温を確認し記載するようになっていたが、日誌には当日も前日も記載されていない。

(顧問)

私は涼しいと感じた。

(副顧問)

その日は、曇っていたから道場に入った時もそんなに暑くないなと感じた。

[練習参加者からの聴取り内容～剣道場の当日の気温について]

- \*夏合宿期間中に比べると涼しく感じた。
- \*全体で書く部日誌には温度を書くところがあるんですが、みんなあまり見て書かない。
- \*涼しくなかった。
- \*(当日はかなりムーとしていた?の質問に)当日もけっこう。はい。
- \*あまり気温は高くなかったと思うが湿度は高かった。
- \*温度計を毎日確認するようになっているが、その日は日誌に書いていなかった。
- \*あの日の温度は憶えていない。剣道場に入った時はいつもと変わらないと思ったが、練習を始めたらちょっと暑いと感じた。
- \*室内の温度は練習前で30度、練習終了後は36度だった。



#### ④練習メニュー(インターバル・練習内容等)

ア. 全体の生徒の練習内容(指導者は防具を付けず指導)

9:00 頃～体操・素振り

9:30 頃～足運び

9:55 頃～水分補給および休憩

10:25 頃～防具(面)をつけての練習(基礎基本の反復練習)

- |                           |                |
|---------------------------|----------------|
| ① 大きく面打ち(約 10 分)          | * 途中、中断し指導を入れる |
| ② 大きくゆっくり一往復の繰り返し(約 15 分) | * 途中、中断し指導を入れる |
| ③ 大きく速く繰り返し(約 10 分程度)     | * 途中、中断し指導を入れる |
| ④ 一息の繰り返し(約 5 分程度)        | * 途中、中断し指導を入れる |
| ⑤ 打ち込み(大技・小技)(約 50 分)     | * 途中、中断し指導を入れる |

～11:55頃終了

\*練習メニューは聴き取りの際に部員に確認した。休憩時間に関しては若干の食い違いも見られたが、それ以外はおおむね確認された。

#### ～剣道用語解説～

##### 面打ち

・打突部位として、面、小手、胴、突きの4箇所がある。面打ちは打突の中でも基本中の基本である。

##### 繰り返し

・正面打ちと連続左右面打ちを組み合わせた剣道の基本動作の総合的稽古法であり、初心者も熟練者も必ず行わなければならない大切な稽古法である。

##### 打ち込み稽古

・指導者(元立ち)の与える打突の機会をとらえて打ち込むことで、打突の基本的な技術を体得させる稽古法である。

練習前半の約55分間では体操・素振り・足運びの練習メニューが消化された。

休憩が終わり練習再開後は面打ち・繰り返し・打ち込みと練習が約1時間30分間続けられた。その内、打ち込み練習に掛った時間が後半の50分間だった。後半の1時間30分間の途中に指導するための中断や一息を入れるための間をとったが、水分補給や面をはずしての休憩はなかった。

#### [練習参加者からの聴取り内容～練習について]

- \*この日の練習はいつもと違い、面打ちなどが終わったらすぐ打ち込みだった。
- \*本当なら打ち込みを何回かやった後に休憩を取るんですが、今回は長くなって、休憩がなくて。
- \*打ち込みの間に休みがほしかった。
- \*顧問の指導に熱が入っていると感じた。
- \*インフルエンザの休みがあったためと思うんですが、顧問も早く取り戻そうというのがあったように。
- \*打ち込みの途中で足が動かなくなったりした。足が重くなった。



\* 打込みの時にクラッとして酸欠になって、倒れるまではいかないが吐き気と目まいがあった。  
 \* 打込みの時、男子が悪くて何回かやらされたんですが、その時はきつくて、途中で面をとったりする人はいました。  
 \* 自分も結構、限界に近付いていたんですが、『合宿乗り越えたけん頑張ろう』と思っていた。  
 \* 倒れはしなかったけど、顧問がやり直しを何回もさせたので、いつもよりきつかった。  
 \* 気分が悪くなった。トイレに行ってもどした。体がだるかったが熱のせいだと思っていた。  
 \* 打ち込みをこんなにたくさんしたのは初めてです。  
 \* 男子ばかり怒られていた。男子はだらけてやる気なさそうだった。  
 \* 早くに打ち込みの合格をもらっていて、元立ちに立って動かなくてよく、ずーと男子が動いてる状態で、女子はそんなにきつくなかった。  
 \* 剣道着が熱かった。みんなフラフラでした。上半身が寒かった。  
 \* 打ち込みの後半時点で、『気合いが足りんのじゃ』と言われて、木刀でお尻を叩かれたので、しら真剣やらないと終わらないと思った。

イ. 本生徒の練習メニュー(指導者は防具を付けず指導)

9:00頃～体操・素振り

9:30頃～足運び

9:55頃～水分補給および休憩

10:25 頃～防具(面)をつけての練習(基礎基本の反復練習)

- |                               |                |
|-------------------------------|----------------|
| ① 大きく面打ち(約 10 分)              | * 途中、中断し指導を入れる |
| ② 大きくゆっくり一往復の切り返し(約 15 分)     | * 途中、中断し指導を入れる |
| ③ 大きく速く切り返し(約 10 分程度)         | * 途中、中断し指導を入れる |
| ④ 一息の切り返し(約 5 分程度)            | * 途中、中断し指導を入れる |
| <u>※一息の切り返しを一人で2回程度追加で行う。</u> |                |
| ⑤ 打ち込み(大技・小技)(約 50 分)         | * 途中、中断し指導を入れる |
| <u>※打ち込みを一人で3ないし4回ほど連続で行う</u> |                |

(全部で10回ぐらい行ったという発言もあった)

\* 本生徒は練習において合格が出るまでの間、他の生徒より多く行った。

[練習参加者からの聴取り内容～本生徒の練習について]

\* 一息の切り返しが他の生徒より多かった。一息だから数回やればきついと思う。  
 \* 顧問が突きダレを上げて叩いたのは初めて見ました。  
 \* 声が出ていなくて、打ち込みを一人で6回ぐらい連続でやらされてフラフラになっていた。  
 \* 本生徒が『もう無理です。』と顧問に言った。いつもだったら絶対に言わない、剣道ではそんなことは先生に言えない。  
 \* 本生徒が『もう無理です』と言った。それに対して顧問が『何言よんのか。お前はキャプテンだろうが、お前の目標は何だ?』と言ったら、『大分県制覇(県大会優勝)です。』と答えた。顧問は『じゃあもう一度やれ』と言った。  
 \* 本生徒は『俺ならできる』と呟っていた。

- \* いつもは黙々とやる感じだけでも、この日だけは『俺頑張るけん』、『合格するように手を上げてな』。とか『キャプテンやけん頑張るけん』と言っていた。
- \* 本生徒が打ち込みの時、竹刀を落したにも拘らず自分では竹刀を持っているようなつもりで、構えていたら、顧問が腰の横を前蹴りした。
- \* 練習中に左足の引きつけが悪いとかで叩かれたりとか、そういうのはありましたけど、前蹴りは見たことがなかった。
- \* 顧問が『芝居じゃろが』(『演技じゃろが』と言った者もいる)という前は大丈夫かなと心配していたが、顧問が『芝居じゃろが』と言ったので、大丈夫なんだなと思った。
- \* 2年の女子が元立ちをしていて、何度かやった後に、男子に元立ちを替わった時に、元立ちが先に発声をしたのに、発声を返さなかった。だから、元立ちが『発声を返さんか』と言って竹刀をはたいた時に、竹刀を落したのに拾いに行かなかった。本生徒は竹刀を持っているようなつもりで構えていた。顧問はその時『演技するな』と言った。それで、演技なのかなと迷った。
- \* 本生徒が立ち上がれない時があって、意識がどんどん遠のいていっていったんで、このままでは気絶するなと思ったんで、コップに水を持って来て、水をかけました。
- \* みんなで声かけをして、立ち上がろうとしなかったのでみんなで抱え起こして、面の上から(生徒が)叩いて、またへたり込んで、またすぐ立ち上がったんですけども、すぐ倒れてしまって、うずくまる様な感じで横たわったので、水をかけようとなり、水をかけた。1回目かけ終わった後に(自分で)面を外して、2回目の時には上半身を起こし、胴を外した。そのとき膝を叩くような素振りをしていた。
- \* 自分らが身体を起こして、そのあと少し(練習を)やったと思うんですけど、その時点で竹刀持てなく、そしてフラフラとして道場の壁にぶつかりそのまま倒れた。
- \* 顧問はキャプテンには厳しかったから、一人でやり直す場面が結構あったから。
- \* 余計にやらされたのは、顧問に期待されていたんだと思います。
- \* 本生徒がキャプテンだったから、そういう面でも一番厳しかった。
- \* 自分から見たら本生徒はしっかり言われたことはやろうとして、向かっているように見えるので、顧問が本生徒に高いレベルを求めていたように思う。
- \* 顧問も大将をやらせるつもりだったんでしょ。

##### 5) 当日の剣道練習中の指導者の指導内容・方法

###### 「顧問の練習に関する考え方」

- ア. 剣道は自分の行き先を照らしてくれるものだと考えていました。そして、きつい場面においては絶対にその人が現れるから、きついところは絶対逃げないようにしようという思いの指導はしてきました。
- イ. 私の指導方針を私なりにまとめた資料(『大きな夢を実現しよう』練習は不可能を可能にする)を生徒にも保護者にも配布しています。基本的には価値ある体験をさせたいと考えています。
- ウ. 本年4月に赴任して以来、生徒たちに言い続けたのは、出来ないこと、自分の持っている癖を直そうとすると時間がかかるが、自分達の持っているいいところ、出来るところを磨いていけば意外と試合というのは楽しく出来るよ。出来ることを一生懸命頑張ろうよと。自分の得意とする部分をどこで出すかを考えるのも面白いよと。このように指導しています。



エ. 生徒には勝負がすべてではないと言っています。一方、負けたら悔しいよとは言っていました。

オ. 夏合宿の時とか予備練習期間中の方が運動量自体を考えれば、もっとやっている状況です。今回は確かに水分補給はできなかったんですけど、間に止めて、集めて、話をするということを何度もやっていましたので、私の中ではイケル、ヤレルという思いが強かったです。前任校の時も、前々任校の時も、もっともっと運動量の多い時はありました。

#### 「当日の練習方法」

(顧問)

練習メニューを消化していく中で、生徒に「審判の有効打突という基準」を意識させ、それが満たされていなければやり直しを繰り返し求めていた。打ち込みの際にはインターバルを取るために元立ちを3人から2人に減らしていた。そして、練習中に何度か全体の動きを止め、「なぜ悪いのかの指導」を入れていた。

打ち込み練習の際には、「有効打突という基準」をもって合格・不合格を顧問が判定し、合格した者から他の生徒の応援に回る方法をとっていた。途中から、顧問は生徒に合格・不合格の判定を委ねた。

(副顧問)

顧問とともに指導にあたり、剣道場内では全体の動きを観察するため、顧問の位置を意識した行動をとっていた。そして、生徒の技術的指導に加え、インターバルを取るために口頭での技術指導を何度か行っていた。

#### 〔練習参加者からの聴取り内容～指導内容・方法について〕

- \* 人数が少なく、男子も女子もみんな出なくてはいけないから、みんなに厳しかった。
- \* 顧問が最初からピリピリしていた。
- \* 練習中に顧問の意に反して合格を出したら、椅子を投げた(びっくりした)。
- \* 顧問は普段は冗談を言ったりして面白いが、練習時は厳しい。
- \* 結果をすごく求める人だったから、勝ちにいく剣道が主体だったから。

#### 6) 事故の予知

(顧問)

打ち込みの最中にフラフラしている状態があったが、今までの稽古をしている時にも同じような状態が見られたので、いつもの状態と思っていた。しかし、意識なく倒れた時点で異常を感じ、水を飲ませたりしていた。数回飲ませた水等を吐いた時に異常と感じた。

(副顧問)

打ち込みの後半に本生徒が面を自分から外して立った時に顔色が良くなかった。そして、竹刀を落した時に異常と感じた。

〔練習参加者からの聴取り内容・本生徒の様子が変わったと思った時〕



- \* 打ち込みの最中に顧問から集められて、円になった時に本生徒の目がいつもと違っていた。目が座って怖かった。
- \* 女子が元立ちで打ち込みをしている時点でバテているなどと思った。
- \* 元立ちが男子から女子に替わったところ。
- \* 一人残って打ち込みをした時に、打った後に倒れたりしだして、うずくまった。
- \* 本生徒が残った時に『もう無理です』と言った時。
- \* 打ち込みの後半に、落した竹刀を拾うとしないで、まるで竹刀を持っているかのように構えていた時点。

#### 7) 事故発生時の本生徒の状況

(この場面における聴取り内容にはそれぞれ異なる点もあったが、調査委員会では以下にまとめた)

一息の切り返しの練習において数回程度他の生徒より多く行ったのに加え、全員が行った打ち込みとは別に、本生徒に合格が出ずに、最終的には一人で特別に数回ほど打ち込み練習を行うこととなった。その際、周りの生徒のかけ声も届いていないようなフラフラな状態が続き、本生徒は顧問に『もう無理です』と言っている。それに対して顧問が『何言よんのか。お前の目標は何だ?』と問いかけたら、本生徒が『大分県制覇です。』と答えた。顧問は『じゃあもう一度やれ』と言った。本生徒も『俺ならできる』と呟いていた等が聴き取りから判った。

さらに、元立ちが男子に替わった時に、元立ちからはたかれて落とした竹刀を拾う事もせず、竹刀を持っているかのように構えていた本生徒を、顧問が『演技じゃろが』と言って胴の横を前蹴りしたことも明らかになった。

その後もフラフラな状態で打ちこみを続けているなかで、数回倒れ、うずくまる様な感じで横たわったので、『このままじゃ気絶する』と思った他の生徒が面の上からコップで水を顔にかけたら、意識が戻ったようになった本生徒は自分で面を外した。

立ち上がった本生徒はやがてフラフラしながら壁にぶつかり倒れた。倒れる際に額に傷を負った。

倒れこんだ本生徒のもとへ副顧問が駆け寄り、壁に身体を持たれかけさせようとしていたら、その場にきた顧問が本生徒に対して、本生徒の横に座って10回程度、強く頬を叩いた。

その後、副顧問が彼を抱き起して、生徒とともに防具をすべて外し、本生徒の名前を呼びかけながら、他の生徒に水分を持ってこさせた。水分を何度か飲ませたら、最初の方は飲んでいなし、呼びかけに対しても小さな声で返答もあった。

そして、顧問の指示により本生徒を寝かせた。顧問は声かけをしながら汗を拭ったり、倒れた時にできた額の傷をタオルで押さえたりしていた。その間も副顧問が何度か水分を飲ませた。

そして、扇風機・保冷剤で脇とか首を冷やしたり、脈を測ったりした。

ところが、その後、飲んだものをすべて吐いたため、119番通報をして救急車を要請した(12時19分頃)。救急車が学校に到着し(12時25分頃)、その後、救急車は学校を12時40分頃出発し、公立おがた総合病院に向かった。

(顧問)

初めは『しゃんとせんか』という気持ちでした。『なんしよんのか、しっかりしろ』という思いです。その後、副顧問が起こしてくれながら水を飲ませました。バツと叩いた時に目を開くよ

うな状況があったので、ああもう大丈夫かなと思うと、またフ～となるので、また叩いて水を飲ましてゴクンと飲んだ後吐いたからこりゃいかんと思いました。熱痙攣のような今まで私が見てきた生徒の症状のようなものではありませんでした。

[練習参加者からの聴取り内容～事故発生時の本生徒に対する指導者の対応について]

- \*倒れた時、どちらも同時くらいに(そばに行った)。
- \*倒れた時顧問が寄って来て、『立て』と言ったが、立てずにいた本生徒を、『演技じゃろが』と言って叩いた。
- \*10回程度、最初は本生徒の横に座って叩いていたが、意識が戻らないので、またがって叩いていて、『目を開けろ』とずっと言っていました。
- \*まだ顧問はその時心配している感じじゃなかった。普通に目を開けないから何回かビンタして。
- \*往復ビンタ10回程度叩いた。そして、『これは熱中症の症状じゃないことは俺は知っているから』と言った。
- \*『目を開けんか』と言っていたんで、意識を戻すためだという事もあったと思うけど、ちょっと強いかなという事もあった。
- \*意識を戻すために叩いたと思うんですけど、少しちょっと強過ぎたかなと。
- \*目を覚ますと『もう打ち込みはしなくていいから』と(顧問が言った)。
- \*顧問は焦っているように。だから危ないなと感じた。
- \*顧問の指示で、防具をみんなで取り、首や脇の下を冷やした。
- \*生徒が脇とか首とかを冷やした。
- \*扇風機・保冷剤で脇とか首を冷やしたり、脈を測ったりした。
- \*水を飲ませた。飲ませる時に座らせて飲ませた。飲んだけど5分ぐらいして全部吐いた。
- \* (救急車を呼ぶのはどれくらいたってから?という質問に)  
結構経ってから、冷やしたり(した後)。10分、15分は経っていたと思います。



#### 4. 竹田高校剣道部事故報告書 調査委員会 総括意見

1) 今回の事故について学校における状況に限って言えば、結論的には熱中症について細やかな配慮がなされず練習メニューが不適切であったことと、練習中の生徒の異常についての発見が遅れたことが要因と考えられる。

① 道場における熱中症対策として、顧問は従来2台の扇風機に加えてもう1台顧問が自費で購入したり、暑さに備えて梅干しや塩、梅干し入りのおにぎりを持参させたり、水分補給に際して従来のお茶に代えてスポーツドリンクを備えたりなどの対策はなしていたが、熱中症に対して練習時いま一段の配慮が必要であった。

② 暑中の練習においては、練習前の生徒の体調や体重のチェック、あるいは練習途中においても体調チェックが欠かせない。また道場の温度チェックも欠かすことができない。

日本体育協会の示すところではこの総括の末尾に示すように乾球温28度以上警戒、31度以上厳重警戒、35度以上では運動は原則禁止とされている。このことから、練習中の室温チェックは欠かせないことである。にもかかわらず、当日室温を公式のチェックした形跡はなく（日誌にも記載されていない）、わずかに、亡くなった生徒の弟が練習終了時にチェックした（摂氏36度）という申し立てがあるのみであり、これは他の生徒や、教員によって確認されていないので、ここでは参考としてしか用いられないが、やはり練習を行う場合には適切な気温であったかどうか疑問視され、練習をするなら一層の配慮がなされるべきであった。

③ また本生徒の他に2名の体調不良者（1名は練習開始前より熱があった可能性がある）がでており、今回のような暑熱環境時においてはいずれかの生徒の申し立て時に、練習を中断し、他の生徒の身体状況のチェックを行うべきであった。

④ さらに、練習時間を見ると、前半は顧問の申し立て通りとすると55分の練習の後30分の休憩時間があり（生徒によっては実際はもっと短く感じたという者もあった）、休憩中の水分補給と身体を休ませる時間はあったと見られる。しかし、これも生徒の申し立てによると、あまりに水分補給をすると汗になっていけないと、水分の補給を自主規制したと見られるものもあった。熱中症予防にかかる水分補給に関して生徒への指導が不十分であったのではないかと見られる。事故当日の練習でとくに後半（休憩後）は、水分の補給や十分な休憩を行うことなく1時間30分の練習が行われており、そのなかでもさらに後半の残り50分間における練習（打ち込み）は、必要な時間を取っての休憩もなしに行われ過酷になったと考えられる（顧問は途中で練習を中断し間を取ったことを休憩と説明しているがこれでは十分といえない）。この間上記2名の他にも「頭がフラフラした」生徒がいたことが今回の調査で判明した（しかし顧問は1名の生徒については把握していたがその他については把握していない可能性があり、これが対処の遅れたことにつながると思われる）。副顧問の証言では打ち込み練習の途中で、よほど太鼓を鳴らして休憩にしたいと思ったが、勝手に判断してはいけないとそうしなかったということである。

⑤ 高校スポーツとしての部活動における夏期練習においては、健康管理上「熱中症対策」はもっと重視されなければならない。本調査委員会ではスポーツ医学の立場からは、厳しい暑熱環境下では、少なくとも15分から20分の練習後15分の休憩という小刻みな練習方法や生徒の状況に応じた臨機応変の措置が望ましいと話し合われた。



⑥ 今回の事故が起こった練習日は、その前に新型インフルエンザ対策として4日間（その前の休日を入れれば7日間）の休止期間があり、8月21日から練習を再開したが、その日は生徒のみの練習で、その練習状態が顧問にとっては十分ではないと感じられていたようである。事故当日（8月22日）は約1週間後に試合を控えて、試合に備えての練習という目標があり、そのために練習が一段と要求水準の高いものになった可能性がある。（従って、休日になまった生徒のからだを一挙に鍛えようとした？）しかしながら前述した日本体育協会のHPでは、暑さに順応させるためには「環境条件や各個人のコンディションに合わせながら、発汗量や体温の上昇にも注意しつつ、暑さと運動に体をならしていくことが必要です。」と述べられている。これら熱中症対策については本調査委員会の委員の所感にも述べられている。

⑦ 生徒の個別事情の把握についても、情報が生かされなかったこと、あるいはその意味するところを理解しなかったことが考えられる。亡くなった生徒は今回の聞き取り調査によれば昨年の合宿中にも「熱中症」を起こし病院で手当を受けている。

日本体育協会のHPでは、

○体力の低い人

○暑さになれていない人

○熱中症をおこしたことがある人

○持久力の低い人（循環機能も低いので暑さに弱い）

○肥満の人（学校管理下の熱中症死亡事故の7割は肥満の人）

は、暑さに弱いとされて要注意だと述べられている。今回の生徒はこのことから見てもリスクが大きかったことが考えられる。

もし、一般的に生徒が練習についていけない場合には、もともと持っている本人の体質、その日の体調などを把握する必要がある。昨年、本剣道部は夏季合宿中に熱中症が出たようである。事前に生徒個人の状況を把握しておかなければ熱中症にかかりやすい生徒への配慮を欠くことになる。

また多少の身体的な不調は、気力があれば乗り越えられると考えれば厳しく練習させることになり、発見も遅れることにつながる。

また、本生徒は家庭では食事時によく水分を取りたがった等の背景もあり、顧問と保護者との情報共有が必要であったと考えられる。

今回、これらの情報が教員と家庭で共有されていたかどうか、必ずしも判然としなかったが、各生徒の体質やこれまでの練習上でのエピソードなどを把握しておくことは現状把握とともに重要である。

⑧ 当日の練習について、本生徒には特に他の生徒よりも多くの練習が課された。このことは、一方ではこの生徒を嘱望していたものの、他方では練習中に後半気力をなくすことを鍛え直さなくてはならないと考えて指導したものと推測される。また本生徒自身もキャプテンとして、次回の試合の選手としての責任感や剣道上達のために顧問の指導に応えようとしたと見られる。

ところで、この日の練習では特に後半の打ち込みにかかってから、この生徒は途中で竹刀を落としたにも関わらず持っているかのように振るまったり、あるいはいつもは弱音を口に出して言ったりしないにもかかわらずそれを口にして「もう無理です」と言ったりした時点で、他の生徒はいつもの様子と違うと気づいたという。また集合したときに面の中の顔を見ると目が座っていて心配になったという生徒もいた。しかし打ち込



み練習でフラフラしかけた本生徒に、顧問は「演技だろう」といい、腰を蹴ったりした。この言葉を聞いて他の生徒は心配しながらもそうなのかと一時は思ったが、今にして思えばやはり弱っていたのだと思うと証言している。その後、いよいよ本生徒が座り込んで、膝を両手の拳でたたき始めたときも顧問は危機的状況だと理解せず、さらに道場の壁に頭を打ち付けるようにして倒れたのちに、頑張らせようと約10回程平手で叩いている。

顧問は平手で叩いても本生徒の意識がもうろうとしており、水を受け付けずに吐いたのを見てようやく本生徒の変調に気づいたと述べている。

なぜこのように顧問による本生徒の変調の発見が遅れたのか。おそらくは、この生徒が普段の練習でも後半「ばてた」ようになるのは、この生徒の気力の問題と考えて、強い指導を加えることで乗り越えさせようと考えたからではなかったか。また試合を控えて設定した到達目標にとらわれていたからではないか。あるいはこれまでの経験の中で、多少体調不良の生徒があっても、このような指導で何とか気力を振り絞った生徒を見てきたからではないか。しかし先にも述べたように、熱中症についての真の理解と個人の体質や当日の体調を十分に把握していればこのような事態は避けられ、みずからの経験則の誤りにも気づくことがあったのではなかろうか。

## 2) 高校スポーツのありかた

一般論として高校におけるスポーツ指導においては、心身の発達途上にある生徒のジュニアのスポーツ医科学を十分に理解したうえで指導にあたるべきである。また、最近の子どもの育つ環境に対しても留意しておく必要がある。現在の大人が育った環境と異なり（以前は徒歩による通学、エアコンのない生活など）生徒の体力が落ちてきている。したがって指導者自らの経験と精神論のみで勝つことを第一として指導することは好ましくない。

指導する時の方法についても、その練習メニューとともに指導のあり方を考えなければならない。新しく開発されつつあるコーチングの技法なども取り入れる必要がある。

複数の教員で指導にあたる時は、一方だけに強いリーダーシップを任せるのではなく指導者間のチームワークが必要であると考ええる。

## 5. おわりに

今回の事故から学ぶことを要約すれば、熱中症に対する知識を持ち、それを夏期練習中には十分に生かすこと、個人の身体条件に対する配慮をすることである。練習メニューは体力や気候条件を考慮に入れたものでなければならず、スポーツ医科学に示されるガイドを考慮し、さらに個々人の体力や既往歴なども考慮されねばならない。指導者の経験則や精神論に偏ったものであれば高校スポーツには事故再発の危険が存在することになる。この教訓を当事者のみならず、今後の高校教育・部活指導に生かしていただくことを切望するものである。従って今後の指導者の研修、生徒の研修に役立てていただきたいと強く願うものである。亡くなられた生徒さんの無念をはらすためにもそうあってほしい。

お子さんを亡くされたご家族には大きな悲しみや無念の思いがある。その思いは察してもあまりあるものである。一方当事者の教師もまた自責感に責められている。生徒の中にも本生徒の死を悼み辛い気持ちをもった者もあろうし、校長先生をはじめすべての学校教職員



にとって教え子を亡くしたことは痛恨の極みであろう。報告書を読まれて再度感情を強く思い出される方もあるかも知れない。関係者の方々のこのような思いが少しでも和らげられることを願うものである。この報告書が亡くなった生徒さんの鎮魂にいささかでも役立てばさいわいである。

資料（日本体育協会）ホームページより）

#### 熱中症予防のための運動指針

WBGT (℃)	湿球温 (℃)	乾球温 (℃)	運動は 原則中止	WBGT31℃以上では、皮膚温度より気温のほうが高くなり、 体から熱を逃すことができない。 特別の場合以外は運動を中止する。
31	27	35	厳重警戒	熱中症の危険が高いので、熱い運動や持久走などは避ける。 体力の低いもの、暑さに慣れていないものは運動中止。 運動する場合は積極的に休息をとり、水分補給を行う。
28	24	31	警戒	熱中症の危険が増すため、積極的に休息をとり、水分を補給する。 熱い運動では30分おきくらいに休息をとる。
25	21	28	注意	熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。熱中症の 兆候に注意しながら、運動の合間に積極的に水分を補給する。
21	18	24	ほぼ安全	通常は熱中症の危険は少ないが、水分の補給は必要。市民 マラソンなどではこの条件でも熱中症が発生するので注意 する。

## Ⅱ部

### 1. 調査委員の所感－今後の事故防止のために

#### (所感1)

近年、高等学校における部活動は、年々その激しさを増している。校内においては他部との競争、校外においても剣道部間の競争は熾烈さを極めている。部活動の目的は何か、顧問は「価値ある体験をさせたい」といっているが「勝負にもこだわりたい」とも言っている。つまり、生徒にはすばらしい思い出を作ってもらいたい、母校の名声を高めたいというのが偽らざる心境ではないだろうか。目標が高ければ高いほど指導にも熱が入る、そういう中で今回の事故は発生したように思う。

現在、剣道部に入部する生徒は、中学校あるいはそれ以前から剣道を学んでいる者がほとんどで、高校に入ってから始める者はそう多くない。ある程度の力を持った者だけに期待もかかる。今回聞き取りをした全員が剣道の有段者であり、亡くなられた本生徒も高校生では最高の3段を取得している。

また、顧問は今年4月に竹田高校に赴任し、剣道部の顧問を務めているが、剣道教士7段で他校でも顧問として指導に当たっており、特に昨年の大分国体では少年男女のコーチを務めるなど、実力的にも人間的にもすばらしい顧問と認識していただけに「何故」という疑問が頭からはなれない。

事故当日(8月22日)の練習計画を見るに、午前中3時間の練習時間と準備運動から始まった一連の基本動作および基本稽古は、通常どこでも行っている練習内容で、特に過酷な練習とは思わ



ない。普段の練習では十分な時間がとれないため土、日、あるいは夏休みなどの期間を使って補習的かつ強化的に練習を実施しているのは、他の高校においても同じである。

今年の夏季期間中、8月1日から8月8日まで(合宿予備練習期間)、8月10日から8月13日まで(夏季合同強化合宿)2回の夏季練習を実施しているが、途中休憩(水分補給)を2~3回入れながら量的にも多い練習内容を無事乗り切っている。では何故当日(8月22日)は乗り切れなかったのか。当日の道場内の気温は1人の生徒によると、開始時は30度前後、終了時には36度前後であったとの証言あり。このことからすると相当蒸し暑かったものと思われる。また道場の両側はすべて窓であるが、そのすべてを開放しても片側は山に遮られ風通しはよくない。大型扇風機を3台備え付けているが効果のほどは定かでない。

また、当日までの1週間はインフルエンザなどのために十分な練習も出来ないまま生徒は当日を迎えている(一部生徒は前日軽い練習)。そんな環境の中での練習で、本来ならば軽い運動から徐々に身体を慣らし、質・量を高めながら指導していくところを、当日は最初から厳しい指導となっている。ただこの場合は準備運動を含めての1時間弱の練習で、この後休憩・水分補給の時間を設けている。

問題は10時25分から始まった「面」を付けてからの基本稽古である。この1時間30分という練習時間は、目標が高ければ高いほど練習内容も厳しくなるのは当然のことではあるが、途中説明を加えながらといっても休憩・水分補給なしは過酷過ぎるのではないか。特に夏季における練習で注意を要するのに、「熱中症」がある。

顧問・副顧問とも熱中症に対する知識は持っており、事前の対策として扇風機を設置しスポーツドリンク、塩、梅干などを準備していたにもかかわらず、この時に限って何故休憩を取らなかったのか、顧問に焦りはなかったか。気温も上昇し一番注意を要する時間帯に、しかも最後に一番厳しい打ち込みを50分間にわたって実施しており、過酷というほかに、この間少なくとも1~2回の休憩時間をとっていたらと思うと残念でならない。

顧問は4月に着任し約5ヶ月。指導者として生徒に対する情報収集は大事な仕事である。各生徒の環境、性格、体質、技能力などの把握。その日、その時の健康状態(体調)のチェック。特に本生徒については、昨年の夏合宿において熱中症で倒れていることからみても、再度熱中症にかかる可能性がある。本生徒には他の生徒以上に厳しい練習が課せられている。これは本生徒のそんな面を知った上で、その強化のための指導であったのか、行き過ぎはなかったか、もっと慎重に限界を見極めながらの指導はできなかったか。

剣道を含めた日本古来の武道では、練習のことを「稽古」という。稽古とは古いことを学習すること。つまり先人の教えについて工夫、研究するという意味です。さらに稽古には「練磨」とか「鍛錬」という訓練的な意味や「修錬」とか「修行」という修養的な意味も含まれ、単に技術を磨いたり身体を鍛えるというだけでなく「剣道を通して人間をつくる」という意味も含まれています。

現在スポーツ関係者の中には精神論(根性論)的指導を否定する人もいますが、剣道の指導においてはこの精神論(根性論)的指導が効果的な場合もあります。もちろん全面的に肯定するわけではないが、科学的根拠に基づいた指導の中でその限界を見極めながら適切に対応すればよいのではないかと思います。本生徒はキャプテンという立場とその責任感から何とか頑張ろうと努力したが、顧問の期待に応えることはできなかった。

顧問と副顧問は練習の最後の最後の時点「一人元立ち、一人掛り」で本生徒の異常異変に気づかれたようであるが、生徒の中には「二人元立ち、打ち込み」に入った時に異常を感じていた者、あるいは「1対1の打ち込み」で、面金越しにすでに異様さを感じていた生徒もいたようである。顧問、副顧問は最初から練習を監視していて、生徒の動きなどから本当に何の異常も感じなかったか。吐



く者が出たり、座り込んだり、かがみこんだりした者が出ているが、熱中症は疑わなかったか、もう一つ言えば何故その時間帯に限りて休憩・水分補給の時間を設けなかったのか。それだけが悔やまれてなりません。

指導者たる者、目先の勝負のみに捉われず厳しい中にも愛情のある、思いやりのある指導を心がけてほしいと思います。

## （所感2）

私はスポーツ医科学の立場から今回の聴取りに参加させていただいた。高校の部活としてスポーツ中の死亡事故は原因が何であれ絶対に避けなければならないのは、指導者、選手、関係者一同まったく同じ思いである。

しかし、それでもなお何故今回の痛ましい死亡事故が起きたのだろうか。関係者から聴取りをさせて頂きその結果、私の立場からは直接間接的に以下の複数の誘因が考えられた。個人的な立場で感想を述べたい。

### 「事故の誘因」

その1. 「顧問の熱中症に対する判断の未熟さ」。今回は最後まで本生徒の異常を見抜けず、熱中症重度症状である「もうろう状態」を最後まで演技であろうと考えていた。選手を信じて欲しかった。そのため対策が遅れた。女子部員を除き、他の男子部員の多くも熱中症で身の危険を感じていた。

その2. 「本生徒の熱中症にかかりやすい体質」。昨年の合宿でも熱中症で倒れている。格段の配慮が必要であったが、最も注意を必要とする生徒に最も過酷な練習を課してしまった。

その3. インフルエンザのため部活休止期間が約1週間あり、その直後の暑熱環境下での練習であったが、暑熱馴化の措置が取られていなかった。推測であるが試合を間近に控えやや焦りもあったのかとも考えられた。

その4. 今回は暑熱環境下で休憩・水分補給をとらず、約1時間30分以上の連続練習をしてしまった。

その5. ひとたび練習が始まると顧問の言動は絶対的であり、生徒たちは逆らえない状況であった。本生徒はキャプテンとして限界を超えるまで応え続けてしまった。保護者の無念さも理解できる。

その6. 「温度計は設置されていたが室内温度が毎回チェックされていない」、学校に部活中の熱中症に対する安全システムが機能していなかった。

その7. 「指導者の勝利に対する思い、選手・保護者の期待」などが本来の高校スポーツの目的を逸脱させた可能性も否定できない。

その8. 練習中に注意を与える時、竹刀や木刀で防具の表面から叩く、突くなどの行動が日常化し、どちらかというと顧問は熱心であるが、荒い指導法をとっている指導者に入ると思われた。

その9. 剣道界を含め、スポーツ指導者の中には生徒を心身の極限にまで鍛え、根性（精神）を養うという安全を無視した古い誤った風土が未だにある。顧問もそれに近い立場かと思われた。

「それでは今回の事故はどうすれば防げたのだろうか。」

顧問は普段から熱中症対策として、生徒にスポーツドリンクや塩、梅干しなどを準備させていた。



また、自費で大型扇風機を購入して練習場に設置する等環境整備の努力もしている。普段は練習30～60分毎に休憩15～30分をとるなど対策をしている。事故当日の室温は30度前後以上あったと考えられ、防具をつけると直腸温はおそらく40度近くになっていたのではないかと推測される。外気温が35度以上になれば原則スポーツ中止という指針もある。それでも今回のように練習する場合は、選手の状態を見ながら練習20～15分毎に休憩、水分補給をとっておれば今回の最悪の事態は防げたと考えられる。ただ、単なる時間の問題だけではない。

#### 「今後の対策」

前述した事故の誘因「その1～9」までをすべて即是正すべきである。スポーツ指導者の意識改革を切望する。指導者は「ジュニア生徒のスポーツ医学・生理学」を学び、いまだ心身ともに発達途上にある高校生には安全で楽しいスポーツを最優先すべきである。指導者は生徒にスポーツを通じ、「努力をする大切さと自主的に考える力、感謝の心」を教え、何よりもスポーツは勝つことが目的ではなく「人間的に成長」するために行うことを強調、指導すべきである。そのためにはスポーツをする喜びと楽しさを常に体験させ、持続させねばならない。

私は今回の事故は顧問の故意や悪意に基づくものとは思わない。しかし、今後も今のような指導法を続ける限り、第二の本生徒が出現しない保証はない。叩き叱責して得られるものは何もない。

熱心な指導者であるがゆえに顧問の今後の再起も期待したい。

#### (所感3)

今回の事故調査委員会では、生徒さんを失われたご家族からの、何故死ななくてはならなかったのかという痛切な思いを受け、二度と再びこのようなことのないようにという願いを込めて、事故の解明のための調査を行わせていただきました。また、この調査が亡くなられた生徒さんへのご供養になれるよう真心をこめてお話を聞かせていただきました。

私たちの調査ではご家族は勿論、部の生徒さん、その親御さん、先生方など皆様方は、とてもつらく苦しい状況にあるにもかかわらず、亡くなられた本生徒さんのために、真摯に向き合ってください、多くのお話を聞かせてください、多くのご示唆をくださいました。

その日の調査が終わり、帰途につく度に、お話をくださった方々の本生徒さんに寄せるたくさんの温かな想いと、それだけにそれぞれの方の心にある深い悲しみや悔しさ、償いきれない後悔や反省などが胸を締め付けるような思いで押し寄せてきました。

本当に人の命は尊く、かけがえのないものです。失った命は二度と帰ってはきません。こんな大切なことを、本当に失った後に、その大切さを改めて確認させられる毎日でした。

ご家族様のお悲しみは深く、お慰めのしようありませんが、もし、私たちの出来ることがあればしてさしあげたいという思いを抱きつつ、心から生徒さんのご冥福をお祈り申し上げます。また、そばにいて助けてあげられなかったと苦しんでおられる部員の生徒さん方が少しでも前に踏み出せますように。何より生徒さんの健やかな成長を願いながら、いかんせん、このような事態を起こしてしまった学校も、ご家族や生徒さん、保護者の皆様が話してくださったことを大切にされ、今後二度とこのようなことが起きないように、生徒が安心安全に学び活動できる学校づくりを再開していただきたいと心から願っています。

縁あって調査の任に当たらせていただきましたので、以下、私の所見と願いを記します。

#### 1 何故、事故は起きてしまったのだろうか？



亡くなられた生徒さんは勿論、その他の部員もそのご家族も、部の顧問、副顧問も、皆様方の胸の中に剣道に対する並々ならない熱い、強い思いがあったように思います。

剣道部では強くなること、試合に勝つことなどを目標として日々の練習(鍛練)に励んでおり、目の前の大会を目指して仕上げる練習に入っていたように思います。しかしながら、新型インフルエンザによる練習の中断があり、特に男子には急ピッチの仕上げが必要だったことが背景にあり、その為、外界の条件や個々の生徒の体調などを見るゆとりもなく、許容範囲を超えた過酷な練習が行われたことが主要因だったと思われます。

しかも、顧問がキャプテンである本生徒に期待をかけ、本生徒も責任感と真面目さでこれに答えようとし、現実の暑さ、熱中症への危惧などに気づくことなく強い指導が続いていたこと。また、本生徒が最後に言った「もう無理です」の言葉も精神の弱さ、怠けと受け取られ、更に強い指導が続き、誰も死なせようと思っていた訳ではないが、結果として熱中症に気づかず、死に至らしめたのではないかと思料いたしました。

## 2 今後、このようなことが起こらないために

今回の事故は行き過ぎた精神論と練習方法により、環境条件や個々の生徒の性格や体質等を度外視したことが背景にあつて起こったものと思われました。従って、今後、生徒の命を守り、二度と危険にさらさないために次のことを提案いたします。

(提案)

- ① 高校教育の中での部活動であるから、今後の剣道部の活動は教育的、科学的配慮のもとに、スポーツを通して生徒の心身の育成を図ることを目的として、部活のあり方を見直し、改めること。
- ② 練習の形態は、高校生の体力に沿ったものとし、適度な休息を入れ、体調を管理し、過度な指導は厳に慎むこと。
- ③ 熱中症については、今後再び生徒の生命を脅かすことのないよう、校内研修を行い、具体的な対処法を学び、実践すること。
- ④ 部活の安全管理体制についても見直しが必要である。  
速やかに、全ての部活内容や実施方法等について見直し、点検し、改善し、予防体制を充実すること。
- ⑤ 学校の危機管理体制についても見直しが必要である。  
速やかに学校の危機管理システムを見直し、事故後の管理者への速やかなる通報、教職員間の連絡・協力、学校医、県等との連携のもと生徒の安心・安全を第一に、教職員や保護者も一体となって対処できるようシステムを見直し、改善すること。
- ⑥ アフターケアについても配慮が必要である。  
亡くなられた生徒さんのご家族は勿論、部員とご家族、先生方も含めて、個々の状況に応じて専門家等の援助のもと、対処すること。
- ⑦ 当面の課題としては亡くなられた生徒さんのご家族の思いを真摯にお聞きし、改善すべきは早急に改め、必要な援助について相談し、真心を持って方法を尽くすこと。  
また、部活の再開を願う生徒については、問題点を改善し、よりよい部活が実施できるよう検討し、援助すること。



#### (所感4)

聞き取りに際し、生徒さんや保護者の方々、顧問の先生方、それぞれが、話しにくい部分についても真摯に向き合って下さったことにつきまして、まずは感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

特に、息子さんを亡くされたご遺族におかれましては、私達の想像を遥かに超えるであろう悲しみの中、切なるお気持ちを話して下さいましたこと、心から感謝申し上げます。ご遺族の苦しさを思うと今でも胸が詰まってまいります。私達はこの出来事から今後にかすものを学びとらねばならないとの決意を強く持つに至った次第です。

また、生徒さんにとっては、多くの大人に取り囲まれた中で出来事を振り返る今回の作業は、とてもつらいものだったでしょう。

一般的に、このような出来事を振り返った後には、自分を責める気持ちが生じたり、或いは直視できないことからくる外罰的な反応、回避的な心境などが生じ、心理的に厳しい状況になることが分かっているため、今回の調査が、再なる心理的な危機状況を招かねば良いかと心配しておりました。

退室の際にはさわやかな笑顔を見せてくれる方も多く、その表情を見て安心したところではありますが、それでも、やはり調査後の心理状態については気になります。

今後も長期的な見通しをもって、心理的な変化や様子を見守っていく必要があるだろうと感じたところです。

今回の行きすぎた練習は、顧問が主将である本人の将来を思い、強くなって欲しいという願いのもとに行われています。その願いの強さのためか、本生徒の「もう無理です」という必死の発言は聞き入れられることはありませんでした。誰もが尊敬し絶対的な指導者である顧問に従うしかなく、この状況を客観的にみれば、ある種の集団催眠的な状況であったとも考えられます。しかし、そのような中でも、経験は浅いはずの生徒らの多くが、顧問よりも早い時点で本生徒の異常に気が付いています。

なぜ、熟達しているはずの顧問の方が、生徒達よりも異常事態への気付きや判断が遅れたのでしょうか。また、このような出来事を二度と起こさないためには、部活動やスポーツに励む子どもに対して、指導者、学校、保護者などの大人は、どのような姿勢で臨むべきなのでしょうか。

このような疑問点をふまえた上で、スポーツや部活動への望ましい指導の在り方について、私は以下のように考えました。

- ① 大人は過去の指導経験を過信せず、常に新しく科学的な見識を深める努力を怠らないこと（例えば、熱中症に強い子どもへの指導経験を重ねると、耐性の弱い子どもについての認識が不足し、判断を誤る危険性があると予測されるため、自身の経験を過信しない姿勢が必要と考える）。
- ② 今回のような事故は身近に起こりうるものと捉え、また、熱中症の耐性の弱さは練習で強くなるといったような、根性論に根差した非科学的な認識や、行きすぎた指導を社会全体で排除する勇気を持つこと。
- ③ 子どもの部活動の成績に、大人が自分自身のコンプレックスや、自身の社会的評価への期待を投影しないこと（大人が大会成績への過度のこだわりを自戒すること）。
- ④ 子どもの心と体の安全のために、大人は部活に第三者の目を入れ、開かれた運営を意識し、指導内容を吟味し、学校はそのための管理に注意を払うこと。

- ⑤ 子どもは絶対的な指導者の下では、自分の体力の限界を省みず、命を落とす程に全力を注ぎ込むことがあるため、その危険性を十分に認識し、冷静な指導を意識すること（催眠的状況下における危険性を意識すること）。
- ⑥ 大人は、自身の感情に依らず、常に冷静な指導が行えるよう、日頃から自分自身の心の健康への意識を高めておくこと。

将来、子ども達が指導者となった時に、同じような過ちを次世代の子ども達に繰り返さないようにするためにも、現在の指導者には、今一度、自身の指導法を省みる勇気を持って頂きたいと切に願っています。

### Ⅲ部

熱中症についての共通理解のために（別冊資料）